中等部案内

2024年

慶應義塾中等部

● 表紙の３―Ｄステレオグラムについて ●

目の焦点を模様に合わせずに，ボーッと遠くを見るようにすると，あるとき突然，模様の中に立体画像が浮かび上がります。オモテ表紙には慶應義塾のペンマークが浮かび，ウラ表紙には凹んだペンマークが浮かびます。　【製作：中山雅紀君（46回生）】

はじめに

慶應義塾は，小学校から大学まで，ひとつの教育目標のもとに，真の一貫教育を行っている学校です。つまり16年，または10年，７年という長い年月をかけての人格の養成と，自分から興味の対象を見つけ出して，これに取り組めるような環境を用意し，各人の自発性をより高めることを主眼にした学校です。

慶應義塾の中学校の段階には，中等部と普通部，湘南藤沢中等部があります。それぞれの特色を一言で言えば，中等部は男女共学75年間の歴史の中で着実な成果を上げている明るい学校，普通部は長い伝統のもとで個性の伸長を図る男子校，湘南藤沢中等部は時代の流れに先行する試みを盛り込んだ男女共学校と言えるでしょう。

中等部に学ぶ男子は３年終了後に，推薦で慶應義塾高等学校，慶應義塾志木高等学校，慶應義塾ニューヨーク学院高等部のいずれかへ進学し，女子は同じく推薦で慶應義塾女子高等学校，慶應義塾ニューヨーク学院高等部のいずれかへ進学し，さらには大学で男女共に学ぶことになります。進学先では勉学はもとより，中等部で身につけた気風を，新たな学友たちに伝える大切な役割を果たすことにもなります。

心身ともに急激な成長期にあたる中学校生活ですから，これを中等部で送るか，他の学校で送るかの選択は重大な意味を持っています。よりよい選択をするために，この案内で中等部とはどんな学校なのかを知ってほしいと思います。

※横浜初等部を卒業した児童が湘南藤沢中等部に入学し，さらに湘南藤沢中等部を卒業した生徒が湘南藤沢高等部に入学するため，2021年度の本校入学生より，湘南藤沢高等部へ進学はできなくなりました。

校舎（本館・新館）

中等部の沿革

中等部の誕生

1947（昭和22）年４月，いわゆる六三制と呼ばれる新学制のスタートとともに，中等部は慶應義塾の一貫教育校の中で，新制度に応ずる新しい中学校として誕生しました。その一番の特色は，男女共学です。福澤先生は，早くから女子教育の重要性を説いていますが，中等部の共学化により，義塾の一貫教育に女子教育が加わりました。ここに福澤先生の理想のひとつが実現したのです。

その意味で，共学実施は慶應義塾の160年に及ぶ歴史の上でも画期的なことでした。

男　女　共　学

創立のころの最大の課題は，この共学をいかに軌道に乗せるかでした。各教員は真剣にこの問題に取組み，それぞれの立場による研究を進め，その研究，実践の記録が1950年に『男女共学とその導き方』という書物にまとめられて出版されました。この出版を中心とした共学に関する実践に対して，慶應義塾からその年の義塾賞が贈られました。現在は当然のように思われている共学についても，中等部には太いバックボーンが通っていると言えるでしょう。

中等部の共学実施の翌1948年，幼稚舎における共学も始まり，その第１回卒業生の女子は1954年に中等部に進学し，その後，女子高等学校を経て，1964年３月に大学を卒業しました。こうして慶應義塾における女子の一貫教育が完成したのです。

生徒会委員会

中等部の教育

中等部の生徒

生徒総数は現在約730名，その内訳は男子約450名，女子約280名です。そのうち幼稚舎からの進学者は男子約90名，女子約140名です。各学年とも男女混合の６クラスです。

中等部の教職員

教員数は部長１名，主事１名，その他の専任教員41名，非常勤教員26名，非常勤の校医７名です。事務職員は事務長１名のほか11名，教科助手３名，用務員５名，保健師１名，カウンセラー１名がいます。その他，生徒たちの学校生活に支障のないよう細かな点にまで気を配ってくれている方々がいます。

教員の間には，教務，行事，図書，年鑑，メディア，施設，保健，国際交流，広報，学校評価，SDGs 委員会，服装，校友会などの諸委員会が設けられ，中等部の運営と教育の充実のために努力しています。

以上のほかに，運動会，展覧会，音楽会，校内大会などの行事を担当する委員会もあって，各行事の運営の中心になっています。

教員の学術研究も活発で，研究会や研究旅行が行われており，教員による著書や学術論文，研究発表や講演なども少なくありません。1995年３月には紀要の『ウェリタース』第１号が発刊され，毎年１回刊行されています。

教　育　課　程

中等部の授業は，年間を通して午前８時10分に始まります。平日は午後２時20分，土曜日は午後12時30分に終わります。なお，週６日制を実施しています。放課後は，校友会（クラブ）活動が盛んで，たくさんの生徒たちが下校時間いっぱいまで様々な活動に取り組んでいます。

授業時間は45分単位です。授業内容は，中学校として求められる課程の習得にあることはもちろんですが，中等部が義塾の一貫教育の一段階である以上，その内容は慶應義塾の教育の総合目的に沿っているものでもあります。つまり，将来義塾の大学各部へ進学するために中学段階において習得すべき内容が課せられているということです。したがって，一般の中学校の課程より少々程度の高い内容を学習します。

週当たり授業時数　　2023（令和５）. 4.

教科／学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語	選択	情報	道徳特別教育活動	合計
１年	6（習字１を含む）	4	5	4	2	2	3	—	6	—	1	2	35
２年	5	4	6	4	2	1	3	2	5	—	1	2	35
３年	5	5	5	4	1	2	2	2	5	2	—	2	35

ここで授業の特色をいくつか紹介しましょう。

英語では，各学年とも週２時間，ネイティヴスピーカーと日本人の教員が一緒に１つの教室で授業を行うティームティーチングを実施しています。この授業でのコミュニケーションの手段は主に英語です。さらに各学年とも週１時間，生徒の習熟度を考慮した少人数クラス編成による授業が行われています。こうした授業では，より実践的な英語の運用能力を高めることを目標としています。また，２・３年生の数学演習（週１時間）と１・２年生の国語演習（週１時間），技術・家庭の授業でも，クラスを２つに分ける少人数授業が導入されています。このように授業サイズを小さくすることによって，ドリルの回数を増やして学習に対する刺激を与え，生徒の学習意欲を高めることやきめ細かい指導を心がけています。

ネイティヴスピーカーとのティームティーチング

３年次には週２時間，選択授業を実施しています。さまざまな講座の中から自分の興味に合ったものを選ぶことができます。

中等部では行事が盛んですが，行事は授業とも密接につながっています。古典芸能鑑賞会は単に劇場に見に行くだけでなく，国語の授業で古典芸能に関することを学びます。また音楽会は音楽の授業で時間をかけて準備し練習した成果をクラスごとに発表します。どちらの行事も本番の舞台を大切にしています。

情報教育としては，１・２年次の情報の授業で，コンピュータに慣れ親しませるとともに，ネットワーク利用上のルールやマナーも指導します。最近では，情報以外の教科や校友会でも，インターネットを活用した調べ学習など，コンピュータを駆使した取り組みを行っています。また，１年次よりタブレット（iPad）を１人１台導入し，各授業や HR 等の特色に合わせて活用しています。

教室外の学習では，工場や各種公共施設などの見学があります。これも，社会科や理科の学習の一環として行われています。また，全校生徒対象の講演会があり，さらに卒業前の３年生に対しては，校外から講師を招いて特別授業が行われます。これは，文学・歴史・自然科学・音楽・スポーツなどの諸分野にわたる講話を聴く課外教養講座です。

このようにして総合的な学習の時間は時間割に組み込まず，各教科や行事の中で総合的な学習の要素を取り入れています。

2020年度は新型コロナウイルスの影響を受け，５月から全ての教科をオンライン授業に切り替えました。Google Classroom を活用した，オンデマンド型の授業です。同６月からは分散登校での対面授業を復活させ，オンライン授業も並行して続けました。

２学期以降はコロナ対策をしながら通常の対面授業に戻し，Google Classroom は各教科の課題や伝達手段として補完的に使用しました。

2021年度・2022年度も流行の時期がありましたが，引き続き対策をし，年間を通じて対面授業を行いました。

油絵の授業

教育の方針

生徒が将来円満な人格と豊かな人間性をもつ人になることを教育目標としていますから，学科においてもかたよらない知識を得，幅広い経験を積むことが大切であると考えています。つまり，慶應義塾の大学を卒業して，社会の中枢の人物になり得る素地を作るためには，いろいろな学問の基礎を学び，様々な経験を重ねることが必要で，それが自分の可能性の発見につながるのです。その際，いかなる場合でも福澤先生の教えが顕在あるいは潜在していることは言うまでもありません。

中等部に学ぶ生徒は，自ら考え，自ら判断し，自ら行動して，その結果に責任を持てる自立した人物になってほしいと願っています。そのため中等部では生徒の自覚と自主性を求める様々な試みを続けています。強制的な補習授業が行われていないのも，生徒の自発的行為に期待するところが大きいからです。この発想を可能にするために教員は生徒に対して個人的な指導に多大な努力を払っています。こうした指導は，教員と生徒との間の絆を一層親密なものにしています。

学期は３期制で，学期ごとに考査等に基づく成績評価が出されます。考査は５回の定期考査のほかに，科目により平常考査が行われます。これは，定期考査と平常考査の両者に一長一短があるため，併用しているわけです。また，レポートの提出やノートの検査，宿題の出来具合等，考査以外にも評価の対象になることがあります。

以上の学習指導のほかに，マナーの面についてもホームルームの時間を週に２回設け，担任教員とクラスの生徒との触れ合いを図る機会にしています。中等部は勉強においても生活においても，人として生きる活力となるような確かな手ごたえ，感動を生徒に求め，そうあるべく指導しています。

健　康　管　理

身体的に成長期でもあり，変革期でもある年齢層にある生徒の健康管理は，義塾の保健管理センターが担当し，毎年学年初めに健康診断を行うほか，適時に検査を行っています。これらのデータは，在学中の生徒の健康状態が一目で分かるよう整理され，また各生徒が確認できるようになっています。

校医は，保健師と共に健康管理に当たっていますが，緊急の処置を必要とする場合を考慮して，近くの病院との連絡も密にしています。

さらに運動部がさかんな中等部では，スポーツドクターによる相談を行っています。ケガの予防やケガをしたあとの対応について専門家のアドバイスを受けられます。スクールカウンセラーは週に２度，相談に対応できる体制を整えています。

施 設 の 現 況

中等部は戦災を被った三田山上の校舎を仮校舎としてスタートし，翌1948年，現在の敷地に移りました。中等部は都心にある学校として敷地も狭く，その点では決して恵まれているとは言えませんが，施設を徐々に増やしながら，教育内容の充実を図ってきました。

体　育　館

施設としては，普通教室の本館と，新館，特別教室棟などがあり，体育の授業や運動部の練習など屋外の運動は，校舎から少し離れた所にある綱町グラウンドを使用します。綱町グラウンドの脇には1993年に武道館が完成しました。

FUTURE 館

また，1990年４月に落成したポプラ館，2000年３月に落成したFUTURE 館には，視聴覚機器をそろえた特別教室が設けられています。

さらに，2011年３月には，アリーナ・中体育室・小体育室・セミナールーム・和室・多目的コート・プールを備えた体育館が竣工しました。

中等部の生活

学　校　行　事

私たちが授業というとき，１年間を通じて校内外で行われる諸行事も，大事な授業になります。また学校主催のものだけでなく，生徒会や校友会（クラブ）が中心になって行うものもあります。学校行事の主なものは次のとおりです。

新入生歓迎会

遠　　足

1　新入生歓迎会（４月）

生徒会委員会と校友会キャプテン会議が主体となって新入生を歓迎し，あわせて校友会の各部の紹介をする催しです。校友会活動の内容を紹介するほか，新入生に記念品を贈ります。校友会各部への入部は，この歓迎会後となります。

2　健康診断（４月）

中等部体育館内で，全校生徒の身長，体重などの計測や，視力・聴力測定，各科検診などを細かく行います。

3　遠　　足（４月または５月）

学年ごとに，近郊への日帰りの遠足を行います。新入生にとっては担任教員とのふれ合い，クラス・同級生との親睦などのよい機会にもなります。

慶早戦応援

校内大会（ドッヂボール）

古典芸能鑑賞会

林 間 学 校

4　慶早戦応援（５月または６月）

春季の六大学野球リーグ戦の慶早戦の応援に，１年生は全員参加します。

5　校 内 大 会（５月・７月・10月）

学年ごとのクラス対抗で，例年，サッカーやバスケットボール，バレーボール，ソフトボール，ドッヂボールの球技や，水泳，綱引きが行われ，全生徒が参加します。

6　古典芸能鑑賞会（６月）

毎年，古典芸能に関する鑑賞会を行っています。国立劇場などへ行き，本物の舞台を観ます。

7　林 間 学 校（７月）

１学期の終りに各学年とも林間学校に出かけます。今年の目的地は，１年生北信，２年生南三陸，３年生蓼科です。各学年とも全員参加で，目的地周辺の地形，地誌，動植物，岩石，歴史などを研究・調査し，その結果をまとめて，展覧会の機会に発表しています。

8　保 護 者 会

年に４・５回，中間考査後や学期末に行います。主としてその学期の成績や生活などについて，担任教員と保護者との懇談があります。

校友会合宿

海外研修旅行

運　動　会

展　覧　会

9　校友会の合宿・旅行（長期休暇中）

各校友会では，夏休みを中心に，学校での活動・練習の他に，２泊から５泊の研究旅行や合宿が行われています。

10　海外研修旅行（長期休暇中）

２・３年生の希望者対象に３種類の海外研修プログラムがあります。春期英国では現地校での授業参加とホームステイ，夏期ハワイでは現地校生と学校の寮に宿泊してのプロジェクト型研修，夏期英国ではアウトドアアクティビティセンターに英国生徒と一緒に宿泊し，参加者は国際的な視野と見識を身につけます。

11　海外提携校日本語研修受け入れ

１学期には米国イオラニ校，２学期には英国ホカリル校の生徒が来校します。１週間弱，２・３年生の中等部生宅でホームステイを体験し，パートナーのクラスの授業に参加します。

12　運　動　会（10月）

大学の日吉キャンパスの陸上競技場で，陸上種目・団体競技などをクラス対抗で行い，優勝したクラスには賞杯が贈られます。また，陸上競技種目で運動会新記録を出した者の氏名と記録は，中等部記録として残ります。

13　展　覧　会（11月）

校友会各部単位で，研究成果を発表します。そのほか学年の部屋では

音　楽　会

生徒会総会

見　　学

卒業旅行

林間学校での研究の発表や個人作品の出品などもあり，展示は20数室に及びます。また，運動部の招待試合も行われます。

14　音　楽　会（12月）

校外の施設を借りて，ふだんの音楽授業の成果を発表します。全生徒は出演者であるだけでなく，よき観客としても参加します。

15　生徒会総会（12月）

全生徒が一堂に会して，よりよい中等部生活のために意見を交換します。

16　キャリア講座（１月）

社会の各分野で活躍している卒業生を10人ほど招いて講座を開き，中等部生はその中から特に自分の関心のある２講座を選んで受講します。昨年度はリモートで行いました。

17　見　　学（３月）

1・2年生は，総合的な学習の一つとして，工場や施設の見学をします。

18　卒業旅行（３月）

３年生は卒業する前に４泊の旅行を行います。福澤先生ゆかりの大分県中津や長崎をはじめとして，九州北部を巡ります。

ニュース・年鑑

中等部における活動を報告したり記録したりするのは，「中等部ニュース」，「生徒会ニュース」，「図書室ニュース」，『中等部年鑑』などです。

校友会のひとつである報道研究会が企画，編集，発行に当たる「中等部ニュース」は，義塾全体の大きなニュースを伝えるとともに，中等部生活を報告し，生徒や保護者はもちろん，塾外の人へも中等部生に対する理解を深めてもらうことを目的としています。

「生徒会ニュース」は生徒会の機関紙で，生徒会の扱う諸問題を中心に報告，提案などを行います。生徒会と生徒全員との連絡を密にすることも発行の目的のひとつで，さらに，校友会の試合結果など速報性のあるものを伝えるため，「生徒会 Hot-line」が発行されることもあります。生徒会スタッフのうち，報道担当の生徒がその編集に当たっています。

「図書室ニュース」は図書室より学期末に発行されます。これは読書指導を目的とするもので，図書の紹介，書評，生徒の読後感想文，新着図書案内などが内容になっています。司書教諭を中心に，図書委員会が編集をしています。また，新入生には，教職員の執筆による『読書のすすめ』を配布しています。

定期出版物としては，教員の編集による『中等部年鑑』が毎年発行されます。これは年次ごとの学内活動の報告を行うもので，本冊と別冊とから成り，生徒の作文や作品，委員会報告，生徒会報告，校友会各部の活動の記録，校友会の研究発表，１年間の日録などが載せられています。

このほか，学年により詩文集や卒業文集，あるいは校友会各部の会誌などが作られており，また教職員の研究報告の場として，紀要の『ウェリタース』が毎年発刊されています。

歴代年鑑

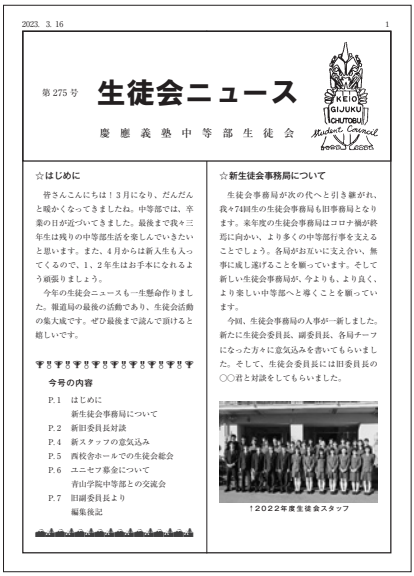
慶應義塾中等部ニュース

中等部ニュース

中等部75周年

主張

「新しい中等部を創る」


2023. 3. 16 1

第275号 生徒会ニュース

慶應義塾中等部生徒会

☆はじめに

皆さんこんにちは！3月になり、だんだんと暖かくなってきましたね。中等部では、卒業の日が近づいてきました。最後まで我々三年生は残りの中等部生活を楽しんでいきたいと思います。また、4月からは新入生も入ってくるので、1、2年生はお手本になれるよう頑張りましょう。

今年の生徒会ニュースも一生懸命作りました。報道局の最後の活動であり、生徒会活動の集大成です。ぜひ最後まで読んで頂けると嬉しいです。

今号の内容

P.1 はじめに
新生徒会事務局について
P.2 新旧委員長対談
P.4 新スタッフの意気込み
P.5 西校舎ホールでの生徒会総会
P.6 ユニセフ募金について
青山学院中等部との交流会
P.7 旧副委員長より
編集後記

☆新生徒会事務局について

生徒会事務局が次の代へと引き継がれ、我々74回生の生徒会事務局も旧事務局となります。来年度の生徒会事務局はコロナ禍が終焉に向かい、より多くの中等部行事を支えることでしょう。各局がお互いに支え合い、無事に成し遂げることを願っています。そして新しい生徒会事務局が、今よりも、より良く、より楽しい中等部へと導くことを願っています。

今回、生徒会事務局の人事が一新しました。新たに生徒会委員長、副委員長、各局チーフになった方々に意気込みを書いてもらいました。そして、生徒会委員長には旧委員長の○○君と対談をしてもらいました。

↑2022年度生徒会スタッフ

中等部ニュース　　生徒会ニュース

生　徒　会

生徒の自治組織である生徒会は，中等部生全員によって組織されています。その中心になっている生徒会委員会は，クラスごとに選出された委員によって構成されていますが，校内美化，募金活動，交通安全への協力など，自主的に，積極的に学校生活の中心となって活躍しています。これらの委員は，各クラスの代表者として，クラスの意見をまとめて，それを定期的に開かれる生徒会委員会に反映させる役目をもっています。

年に一度の生徒会総会では学校生活の共通の問題をとりあげ，全員で意見をたたかわせ，時には学校側に提案することもあります。

校　友　会

中等部生活の特色のひとつに活発な校友会活動（クラブ活動）を挙げなくてはなりません。生徒はそれぞれ自分に適した校友会に所属し，それを通して個性をさらに伸ばし，悔いのない学校生活を送ってこそ，一貫教育の一段階としての中等部生活の意義があると言えます。校友会には学芸部21，運動部17の部があります。

学芸部　根気強く地道に研究するクラブ，発表や公演を目標に努力するクラブと多種多様です。

英語研究会，化学研究会，カメラクラブ，器楽部，気象・天文・生物愛好会，近代劇研究会，コーラス部，コンピュータ研究会，茶道部，社会研究会，将棋部，書道部，地理研究会，図書の会，美術部，文芸部，報道研究会，マンドリンクラブ，模型部，料理と手芸の会，歴史部

運動部　歴史の新旧によってその活躍も様々ですが，多くの公式戦に参加し，優秀な記録や戦績を残しています。普通部や湘南藤沢中等部と定期戦を行っている部も少なくありません。

弓術部，剣道部，サッカー部，山岳部，柔道部，女子ソフトボール部，水泳部，体操部，卓球部，テニス部，馬術部，バスケットボール部，バレーボール部，フェンシング部，野球部，ラグビー部，陸上競技部

校友会活動の目的は，教員と生徒との信頼，生徒相互，特に学年間の縦の親睦などを，それぞれの研究や活動を通して深めることにあります。これは教室における生活だけでは行われにくいことなので，中等部の校友会活動は，その意味でも，目的を十分に果していると言ってもよいでしょう。

バスケットボール部

弓　術　部

体　操　部

山　岳　部

マンドリンクラブ

書　道　部

基　準　服

中等部には，普段の登校の際に必ず着用しなければならない制服はありません。

しかし入学式，卒業式などの式日，およびそれに準ずるような行事の日には必ず着用することになっている基準服があります。制服を定めないと華美になるのではないかという恐れもありますし，中には確かに好ましくない服装で登校する生徒も出てきますが，年齢にふさわしくない大人びた服装や，品位を欠く服装をしてくる生徒がいた場合には，その都度注意することによって，考えさせ，改めさせる指導を行っています。これも中等部の教育，生活指導に対する考え方のひとつの現れです。

中等部の服装に対する考え方は，自己の判断，あるいは家庭の協力によって，年齢にふさわしい，しかも個性を生かした服装をすることにあると言えます。ただ，それにはその判断のよりどころとなるものを与えなければなりませんし，中学生という年齢層には，時には，はっきりした基準を示さなければなりません。それが，中等部の基準服ということになります。

基準服（夏服と冬服）

自由と規律

中等部は規則が比較的少ない学校ですが，これは，規則があるからやむを得ず守ろうとか，規則にないから何をしてもかまわないというような考えではありません。誰もが自分で事柄の根本を考え，判断して行動するという習慣を養うために「べからず」式の禁止事項は最小限に止めようと努力しているのです。しかし，時により事柄によっては，厳重な「きまり」を強制する形をとる場合も当然あります。社会常識から，また中学生という年齢層からみて，ふさわしくないと思われることは，はっきりと禁止することもあります。

中等部の歌

折口信夫 作詞
芥川也寸志 作曲

一、風に　ひらめく
色の　さやけさ
慶應の旗
いよいよ　はえむ
　若きは　清くあれ

二、海の　反射は
三田を照して
独立の塔
ますます　かがやく
　若きは　ほがらなれ

三、来たれり　今や
自尊の　世代
この我を見よ
学に　そそれり
　若きは　ほこりあれ

四、今や　自尊の
世代　来たりて
慶應の旗
独立の塔
いよいよ　照らむ
　若きは　ゆたかなれ

中等部の歌のそれぞれの節の最後の言葉「若きは清くあれ」「若きはほがらなれ」「若きはほこりあれ」「若きはゆたかなれ」これが中等部の理想，中等部の教育，中等部の生活を端的に表しています。

福澤先生と慶應義塾

慶應義塾とその創立

慶應義塾は2008年に創立150年を迎えました。したがって，その創立は，1858年ということになります。所は，江戸の築地鉄砲洲にあった中津藩中屋敷の内で，今はこの地は聖路加国際病院の構内にあり，病院前の道路上緑地帯に「慶應義塾発祥の地」の記念碑が建てられています。

慶應義塾発祥の地

塾歌

富田　正文　作詞
信時　潔　作曲

一、
見よ　風に鳴るわが旗を
新潮寄するあかつきの
嵐の中にはためきて
文化の護りたからかに
貫き樹てし誇りあり
樹てんかな　この旗を
強く雄々しく樹てんかな
あゝ　わが義塾
慶應　慶應

二、
往け　涯なきこの道を
究めていよゝ遠くとも
わが手に執れる炬火は
叡智の光あきらかに
ゆくて正しく照すなり
往かんかな　この道を
遠く遙けく往かんかな
あゝ　わが義塾
慶應　慶應

三、
起て　日はめぐる丘の上
春秋ふかめ揺ぎなき
学びの城を承け嗣ぎて
執る筆かざすわが額の
徽章の誉世に布かむ
生きんかな　この丘に
高く新たに生きんかな
あゝ　わが義塾
慶應　慶應

福澤先生の生い立ち

創立者福澤諭吉先生は，1835年１月10日，大阪堂島５丁目玉江橋北詰にあった，中津藩の蔵屋敷で生まれました。福澤家は代々中津藩に仕えていた下級武士であり，先生のお父さんの百助が廻米方という役目で大阪に在勤している時だったのです。現在この地は，大阪市福島区堂島浜通りで，「福澤諭吉誕生地」の記念碑があります。

先生は５人兄弟の末っ子でした。お父さんの百助は13石２人扶持の，会計官史という下級武士でしたが，若い時から学問が好きで，学者として藩中から認められていましたし，篤実謹直な人柄で，人々に畏れはばかられた人物でした。お母さんのお順は，同じ中津藩の橋本家の娘で，その父は漢学塾を開いた学者でした。このように，父母ともに学問に縁のある家系であることは，後の福澤先生を生み出したことと無関係ではないでしょう。

ところが，お父さんは，先生が生まれて18か月で亡くなりました。一家は，お母さんに連れられて郷里の中津に帰り，お母さんを中心とする生活が続きます。このお母さんがまた特色のある女性で，先生の人柄が作られていく上に大きな力を及ぼしています。先生の書かれた『福翁自伝』を読んでみますと，このお母さんの飾り気のない温い人柄や，周囲に付和雷同しないで我が道を行くといった趣き，しかもその個人主義を少しも力まないで自然に生活の中で実行していく，もったいぶらない人柄が，よく感じられます。又，母お順の話には自然に父百助のことが多く，父は死んでも生きているようなものであったのです。こうして，彼女は亡き夫の遺した誠実な家風を，特別やかましくも言わないで，ごく自然に明るく維持し，5人の遺児たちに暗いじめじめしたものをもたせるようなことはしませんでした。こうして父の遺風と母の感化力によって正しい家風の中で，先生は幼年期を伸び伸びと過ごしたのです。

14～15歳で勉強を始める

家風は，このようにごく正しい家庭でしたが，何分にも貧しい下級武士の家ですから，毎日の生活に追われ，お母さんも，子どもたちの勉強の世話まで手が回りませんでした。先生自身も，勉強はあまり好きではなかったので，14～15歳になるまで，当時の学校，つまり漢学塾へも行かずに過ぎてしまったといいます。一方，先生は，生来手先が器用で，日常の身近な仕事一切を引き受けて，桶のたがを入れたり，戸の破れ，屋根の雨もりの直しまでもやっていました。更に貧しい家計の助けにと，下駄を作ったり，刀剣の細工もしました。

しかしさすがに，周囲の子供達がみな書物を読んでいる様子をみて，初めて自分も本が読めなければ恥ずかしいと気づいて，塾に通い始めました。ところが，勉強を始めるとたちまち頭角を現し，4～5年たつと「漢学者の前座ぐらい」になったと言われます。

洋学に志す

大きくなるにつれて，幼少のころから合理的精神に富んでいた先生は，封建の門閥（もんばつ）制度に固められた中津にいることがたまらなく嫌になってきました。何とかして自由な天地へ飛び出したいと思っていたとき，兄さんの三之助（さんのすけ）に洋学修業を勧められて，長崎へ勉強に行くことになりました。当時は，鎖国の世の中でしたが，時世は次第に西欧の科学を求めざるを得ないようになってきた，そんな時期だったのです。先生が数え年で21歳の時のことでした。

長崎には約1か年滞留し，オランダ語（蘭学）を学んでいましたが，事情があって，兄三之助の在勤する大阪に行き，その地の高名な蘭学者で，独立の精神に富んだ緒方洪庵（おがたこうあん）の適塾（てきじゅく）に入門しました。これから先生の本格的な洋学修業が始まります。この緒方塾での生活は，面目躍如たる活気に満ちたものでしたが，勉強にもまた熱心で，在塾およそ2年で塾長にあげられています。ここで，生物学，物理学，化学などの自然科学を学び，漢学に対する不信と近代科学への信頼の念を強め，先生の考え方の方向が決定的になったのです。

福 澤 旧 宅

江戸へ呼ばれて蘭学塾を開く

さて，中津藩には，以前から蘭学を重んずる藩主もあり，また有名な蘭学者である前野良沢（まえのりょうたく）を出していましたが，幕末に至って，藩の子弟に本格的な蘭学の勉強をさせる必要が生じてきました。そこで，よその藩から松本弘安，杉享二といった蘭学者を招いて先生としていましたが，藩中に福澤というのがいて緒方塾の塾長をしているということが分かったので，他国のものを雇うことはない，藩中の福澤を呼べということになって，先生が江戸へ呼ばれることになったのです。これが1858年の秋――先生25歳のことで，こうして江戸へ出て，奥平家の中屋敷に蘭学塾を開きました。これが，今日の慶應義塾のはじまりなのです。

蘭学から英学へ

江戸に開塾の翌年，1859年，先生は，開港間もない横浜を見物に出かけました。自らのオランダ語の力を外国人相手に試そうとしたのです。ところが，いざ行ってみると，全てが英語で，オランダ語は少しも通じないばかりか，店の看板も，商品のラベルも読めなかったのです。これを機に，先生はこれからは英語が必要になってくると考え，志を新たにしてほぼ独学で，英語を学び始めたのでした。

慶應義塾のはじまり

はじめは先生を中心とした家塾であり，名称も公に定められたものでなく，藩中では蘭学所，世間では福澤塾と言っていました。それから約10年後の1868年に，芝の新銭座に塾舎を新築し，時の年号にちなんで慶應義塾と名づけたのです。その後，ここが手狭になったので，1871年の春，今日の義塾の所在地である三田に移りました。

さらに，今日の総合学園である慶應義塾に成長するまで，危機，改革，発展の歴史があるのですが，いまはそれを省略して，慶應義塾の内面的な問題について述べてみたいと思います。

福澤先生は，慶應義塾をどんな学校にしようとしておられたのでしょうか，塾生に何を求めておられたのでしょうか。それについては，義塾の創立後十数年間に先生が実行されたことや，書かれたものなどを中心にしてみると，おおむね分かるようです。ごく大切なことを，いくつか述べてみましょう。

鉄砲洲に塾を開いてから，新銭座で慶應義塾と命名するまで，約10年が経っていますが，この10年間は，先生自身の，思想的発展にとって，したがってまた義塾の発展にとっても，大変重要な10年間でした。この間，先生は米国に２回，欧州に１回の３度外国に渡航し，近代文明の実地に接して，その見聞を広め，今後の日本のあるべき姿，それに対する自己の使命というものに，一層自覚を深められたと考えられます。また，先生の学問は，初期の自然科学から次第に範囲を広げ，経済，歴史，道徳の方面にまで及んでいきました。その学問，思想の深まりの中から，義塾建学の精神が次第に明確なものに固まっていき，遂に，近代私学としての慶應義塾の誕生となるのです。

近代私学としての慶應義塾

ヨーロッパ旅行中に，先生は学校のあり方について，念入りに実地を調査されました。そして，近代の学校は漢学塾のように個人の私有物ではなく，先生の言葉をもってすれば，「共立学校」という形であるということを知りました。先生はそこに，中津藩の家塾である福澤塾を，藩からも，また社会一般からも独立させる方法を見出されたのでしょう。1868（慶応４）年，新銭座に塾舎を新築するとともに，時の年号をとって慶應義塾と名づけましたが，この義塾というのが，パブリックの学校という意味であり，慶応という年号を校名に使ったのも当時としては極めて珍しいことで，すでに福澤個人からも，また藩からも独立したことを意味していたと言えるでしょう。

このとき，先生は「慶應義塾之記」を印刷，頒布（はんぷ）し，義塾の主義精神を宣言しましたが，そのはじめに

「今爰（ここ）に会社を立て義塾を創（はじ）め，同志諸子相共に，講究切磋（せっさ）し，以て洋学に従事するや，事本と私にあらず，広く之（これ）を世に公にし，士民を問わず，苟（いやしく）も志あるものをして来学せしめんを欲するなり」

と書いておられます。ここに「会社」とは，英語のコーポレーションのことで，同志の者が社を結んで学校をつくり，その同志の者が力を合わせて学校を維持，経営していくという建前をとったことを示しているのです。後年，先生は自分で買い入れ，建てられた塾の敷地や校舎を，すべて義塾の所有に移してしまいましたが，これもこの精神の現れと言えるでしょう。

大学旧図書館

福澤諭吉肖像

独立自尊の額

また，新しい学校のあり方のひとつとして，先生は，当時の慣習に反して，授業料をとって，学校の維持費とすることを始めました。先生は『福翁自伝』の中で

「いまでは授業料なんぞは普通当然のようにあるが，ソレを初めて行うときは，実に天下の耳目を驚かしました」

と書いておられます。

このように，慶應義塾は誕生10年目に，家塾という存在から脱皮して，いわばひとつの共同結社として再出発しました。したがって教員も生徒も結社の一員という考え方であり，そこに義塾特有の，「社中（しゃちゅう）」という言葉が生れたのです。1868年４月10日付け山口氏あての書簡で，先生は，新銭座の新しい塾について近況を報じた中で

「僕は学校の先生にあらず，生徒は僕の門人にあらず，之を総称して一社中と名づけ，僕は社頭の職掌相（あい）勤め，読書は勿論，眠食の世話，塵芥の始末まで周旋，其余（その よ）の社中にも，各々（おのおの）其職分あり」

と書いておられます。

実学と独立の精神

この慶應義塾の中で，先生が塾生に与えようとされたものは，西洋の学問と独立の精神でした。西洋の学問を先生は「実学」と呼び，この「実学」という言葉に，サイヤンスとふりがなを付けられました。これは自然科学のみならず社会科学までを含む，広い意味のものなのです。先生は，さきにあげた「慶應義塾之記」において，洋学を「天真の学」と呼び，「人として学ばざるべからざるの要務」としています。そして，洋学を究めることは難しいが，難しいとてこれを求めず，益のあることを知ってこれを盛んにしないのは「報国の義なきに似たり」と言っておられます。

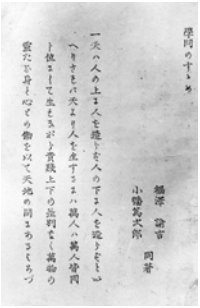
このように実学を高く評価するとともに，先生は塾生に対して，単に実学を頭に入れるだけでなく，それを実地に生かすことのできる人になれと教えました。ここに，先生の大きな特色があったのです。先生自身が，狭い意味の学者に止まるような人物ではありませんでしたが，塾生に向かっても実業界に入ること，独立の商工業者となることを常に勧めておられました。義塾の精神を体した人物が実社会に充満することが日本の発展のために必要である，と考えておられたのでしょう。

実学とともに先生の求めたものは，独立の精神でした。生まれつき合理的精神と独立心に富んでおられた先生は，洋学を学び，西欧文明の実地に接するに及んで，西洋にあって東洋にないものは合理的精神と独立心であるという信念を強められ，日本で欧米の国々と肩を並べるには，この二つが絶対に必要であるとの確信に達したのでした。明治３年に先生は，「中津留別（りゅうべつ）の書」の中で，人間の自由独立ということが，個人にとっても，社会国家にとっても極めて大切なものであり，「此（この）一義を誤るときは徳も修むべからず，智も開くべからず，家も治まらず，国も立たず，天下の独立も望むべからず」と言っておられます。

学問による報国

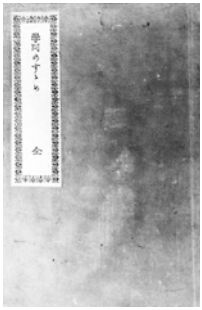
開国か攘夷か，佐幕か勤皇かと，血なまぐさい風が吹きあれた維新前後にあって，先生は慶應義塾の本分は学問の命脈を絶やさず，学問によって国に尽くすところにある，と筆にもし，行動にも現しておられました。1868年５月，官軍の江戸攻略に，市民が戦々兢々としていたときも，義塾は講義を続けていました。なかでも，5月15日上野彰義隊の戦争の日は，先生の講義の日に当たっていたので，ウェーランドの経済書の講義を平常通り続けておられたという話は有名です。その年の７月，先生は「中元祝酒之記」を書いておられますが，それによりますと，当時の先生は，世の中が戦争で騒然としている中にあって，ひとり慶應義塾のみが静かに学問の道に励んでいることについて，我々は「天道の法則に従って天賦の才力を用いて」いるのであり，これによって「済生の一斑を達し」ているのであるという，非常な自信を示しておられます。

こういう精神による学問の態度は，もとより単なる西洋崇拝，洋学心酔ではありませんでした。日本人としての自覚と独立心とを片時も忘れるものではなかったのです。たとえば，維新の戦乱のときにはこんなことがありました。当時官軍の江戸侵入から身を守るため，外国公使館の印鑑をもらい受け，外国人の保護を受けようとする者が現れました。ある人が，それを義塾の者にも世話しようと申し出たとき，義塾社中では，我々は好んで外国の書を学んではいるが，日本人として内外の分は決して忘れない。今の戦いは内戦である，外国人の力を頼って身の安心を図るようなまねはしたくないと言って，これを断ったのでした。


學問のすゝめ

福澤 諭吉
小幡篤次郎 同著

一天ハ人の上ニ人を造らず人の下ニ人を造らずと
いへり されバ天より人を生ずるハ萬人ハ皆同
じ位ニて生まれつきたる上ハ萬物の
霊たる身心の働を以て天地の間ニあらゆる事


學問のすゝめ

会

「学問のすゝめ」
表紙と第一ページ

正しい規律

血なまぐさい乱れた世であれば，世間一般に学塾の規律が乱れるのも無理のないことでした。慶應義塾といえども，初めはその例にもれるものではなかったようですが，先生は漸進的に，正しい規律を確立しようと努力されました。当時の義塾は，洋学塾としては私塾中随一であるが，不規律で乱暴であるという世評があったと言います。もちろんこれは，先生が漢学塾の形式主義に反発した結果であるとともに，他方においては，時勢による自然の傾向を無理に矯(た)めようとしない方針にもよったことであろうと思われます。しかし，先生はヨーロッパ旅行から帰朝されたころ1862年から，しだいに塾生生活を引き締め始めました。1864年には郷里中津から優秀な青年6人を引き連れてきて，塾風刷新の人的配置に手を打ちました。この中には，後年先生の片腕となった小幡篤次郎(とくじろう)，甚三郎(じんざぶろう)の兄弟もいました。他方，塾の規則を制定し，金の貸借や抜刀を禁じたり，就寝・食事の時間などもはっきりと決めました。同時に，先生が先に立って，乱暴書生を相手にして体あたり的に規律を正したのです。後年の有名人で，当時品行が悪いので退塾を命じられた塾生もいました。

しかし，先生は堅苦しいことのみを要求したのではありませんでした。漢学塾の形式ばったことに最も反発を感じる先生であり，生来，陽気な性分でしたから，規律を正しつつも，時には塾生の仲間に入り，共に語るという親密さを忘れていませんでした。これがあるゆえに，先生の努力は実を結んで，自然によい塾風ができ上がっていったのです。1867年に江戸に出てきて，福澤塾の不規律，乱暴を聞いて，他の塾へ入っていた者がその後一旦帰郷し，1870年再び上京，新銭座の義塾に来てみて，先の評判とはうって変わった規律正しさに驚いたという話が伝わっています。三田に移ってからは環境の整備と相まって，塾生生活は一層整然としたものになりました。破れた袴，垢(あか)じみた着物に無頓着を装(よそお)い，大言壮語する書生風を軽蔑して，きちんと角帯をしめて，さっぱりした服装が，塾生のしるしとなったのでした。

気品の泉源・智徳の模範

先生は，当時の日本において，真の独立の精神の体得者，実践者は，義塾社中のものを除いては他にないというほどの自信をもっておられました。「学問のすゝめ」五編（1874年）においては，義塾の期するところは全国の独立を維持するの一事にあり，と述べておられます。先生にとって独立の精神とは，文明の精神のことなのです。つまり近代文明の担い手，指導者はわが社中をおいてなしという自負心です。

しかし，ここで注意すべきことは，先生はこのように強い自信を持っておられましたが，一方において謙虚な心構えを持つことを社中に要求しておられることです。1876年に執筆された「慶應義塾改革の議案」の冒頭には

「我が慶應義塾教育の本旨（ほんし）は，人の上に立ちて人を治むるの道を学ぶに非ず，又人の下に立ちて人に治めらるるの道を学ぶに非ず，正に社会の義務を尽さんとするものなれば，常に其精神を高尚の地位に安置せざるべからず」

とあって，非常に先生らしい，清新な，気品に満ちた考え方が現れているように思われるのです。

誠に，「気品」こそは，先生が慶應義塾全体に求めたものの中心であったと言ってよいでしょう。

1896年秋，芝紅葉館における旧友会の席上，先生は一場の演説を行い，

「我々の特に重んずる所は人生の気品にあり，人の気品の如何（いかん）は尋常（じんじょう）一様の道徳論にいう善悪正邪などという簡単なる標準を以て律することは出来ないが，気風品格の高尚なるものがなければ才智伎倆（ぎりょう）の如何に拘（かかわ）らず君子として世に立つことは出来ない」

と述べ，幸いにして義塾には鉄砲洲以来「固有の気品」あることをたたえ，次のように義塾の目的を宣言されました。

これを掲げて，この稿を終わることにしたいと思います。

「老生の本意は，此慶應義塾を単に一処の学塾として自ら甘んずるを得ず，其目的は我日本国中に於ける気品の泉源，智徳の模範たらんことを期し，之を実際にしては居家処世立国の本旨を明にして之を口に言うのみに非ず，躬行（きゅうこう）実践以て全社会の先導者たらんことを期するものなれば，今日この席の好機会に恰（あたか）も遺言の如（ごと）くにして之を諸君に嘱托（しょくたく）するものなり」

中　等　部　案　内

2023年 9 月 1 日発行

慶　應　義　塾　中　等　部

〒108-0073
東京都港区三田2－17－10
電　話（03）5427－1677
FAX（03）5427－1676
https://www.kgc.keio.ac.jp

KEIO